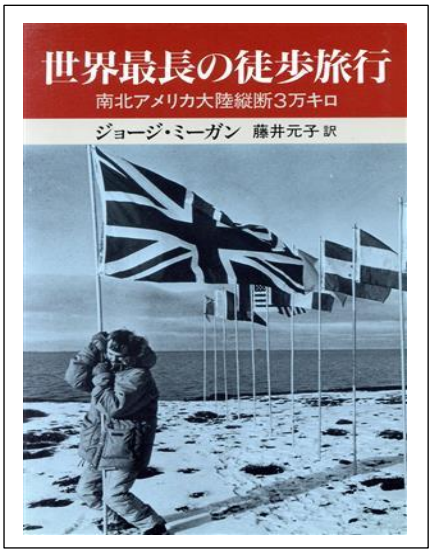
世界最長の徒歩旅行　南北アメリカ大陸縦断３万キロ　その１

ジョージ・ミーガンとヨシコ　　アルゼンチン　ボリビア



長い距離を歩いた人の記録、タネ切れになって来た。グーグルで世界最長の徒歩旅行と検索したところ、ヒットした本があった。イギリス人、冒険家ジョージ・ミーガン著の「世界最長徒歩旅行」であった。ジョージ・ミーガンガンは 1977 年 1 月 26 日、南米大陸最南端のウスワイアを出発し、1983 年 9 月 18 日、アラスカ北端ブルドー・ベイ到着まで 6 年 8 か月掛かって 14 か国を踏破した。今回はミーガンと日本人妻ヨシコの記録の紹介です。

この記録は、残念なことに全 290 頁中、242 頁が中米グアテマラまでの記録でメキシコについては皆無、アメリカ、カナダ、アラスカの記録は僅かしかないことです。全体から見ると饒舌な部分もあり、編集者を兼ねた訳者は紙数の関係で割愛せざるを得なかったと述べているが　編集の工夫が必要ではなかったかと思われる。

プロローグ：

ジョージ・ミーガンはイギリス、ミドルセックスのヒリングドンという所で 1977 年生まれた。幼くして母を亡くし母親を亡くし。叔母夫婦の養子として育てられた。叔母夫婦に住むレイナムの町から 1.5km ほどの所に大冒険家、フランシス・ドレイク卿（イギリス人最初の世界周航者）の邸宅があった。その影響を受けて幼い頃から世界への旅に一種の憧れを持っていた。17 歳の頃、不定期貨物船に乗って、初めて遠洋航海に出かけた。二等航海士の資格を取得して、単なる夢ではなく遠い異国への憧れ、地球一周の大冒険に挑もうという気持ちは執念に近いものになっていた。船乗り仲間や友達を探し始めたが同行者は見つからず、一人で出かける決心を持ち始めた。

そんな中、同行者が見つかったのである。のち妻となる日本人。ヨシコ（松本良子）である。ヨシコは名古屋でＯＬをしていたが、あるとき伊豆へドライブに行き、雨の中、街道筋を歩いていた外国人ハイカーを拾ったのが出会い。ジョージを名古屋港まで送り別れる。その３カ月後、ジョージが再び日本にやって来て、二人で富士山に登った。富士登山後、二人は何度か会い、徒歩旅行の道連れとして出かけるつもりはないか尋ね、ヨシコは即座に同意した。ジョージは一旦、イギリスに戻った。その後、ヨシコはイギリスまで訪ねて行った。養母はヨシコのことを気に入り結婚するよう勧めるほどであった。

ティエラ・デル・フエゴからチリ領を経て南米本土へ

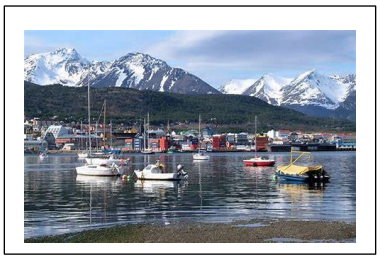
いよいよ、全行程約３万kmの徒歩旅行に出発することになった。南から北上するルートにしたのは、のち、1982 年、英・ア間のフォークランド戦争が勃発し、南アメリカ諸国がアルゼンチンを支援したことを考えれば正解であった。ジョージは南米行き貨物船に乗ることはできたが、船会社はヨシコの乗船を認めなかった。

ヨシコは三週間後、イギリスを出発し、ブエノスアイレスで落ち合った。その後、ブエノスアイレスから、フェゴ島の**リオ・グランデ**に飛び、それから 100 数km余先のウスワイアの町までバスで南下した。**ウスワイア**は地の果てともいうべきティラ・デル・フエゴ（火の地）本島南端の町だった。（ティラ・デル・フエゴについては本 HP 拙稿参照）何の変哲もない町でビーグル海峡に面し、さして広くもない平野に 300 戸ほど軒を連ねていた。

1977 年 1 月 26 日、いよいよ徒歩旅行の第一日。この地では今は真夏だというのにテントにびっしり霜。ビーグ

ル海峡は静かな波が打ち寄せていた。以後、農場に泊めてもらうか野営の連続。農場は必ずしも好意的でない。

ウスワイアにある世界最南端の標識（fin del mundo）



ウスワイア　ビーグル水道に面し人口 7 万人（2014）保税加工区、漁業基地

リオ・グランデ：到着日・距離不詳。通過後、いたるところに堀井戸のある油田地帯。10 万頭の羊を放牧していると言われるフエゴ島最大の牧場に着く。強風に悩まされながら進む。2 月の半ば、ティエラ・デル・フエゴの中央を南北に走っている国境線を越え**チリ領に入る**。（19 世紀に勃発したチリ・アルゼンチン戦争以前は、フエゴ諸島全域がチリ領であった）チリ領に入ってとたんに悪路となった。

フェリーでマゼラン海峡を横断すると南アメリカ大陸、延長 450 kmのフエゴ島縦断を達成。地方行政の中心地**プンタ・アレーナス**に到着。広場や庭園が整然とレイアウトされ堅牢な建物や商店が立ち並び、威風堂々たる街、マゼラン海峡に面し北には雪をかぶったアンデス山脈の峰々が見えた。かってこの町はパナマ運河が開通するまで栄えた。英国領事館を訪問、領事に会い郵便物を受け取る。（到着日、出発日、行き先の記載なし）

リオ・グランデの町　プンタ・アレーナスとマゼラン海峡　2012 年人口 12 万人、羊毛と石油採掘基地

パタゴニア

アルゼンチンの南部**サンタクルス州**に足を踏み入れたのは 2 月も遅くなってからであった。ここはパタゴニアと呼ばれている地域。サンタクルス州だけでもイギリス本土がすっぽり入る面積。州都**リオ・ガジェイゴス**は人口 8 万人、（当時）南アメリカ大陸最南端の町である。これから先、アラスカまで

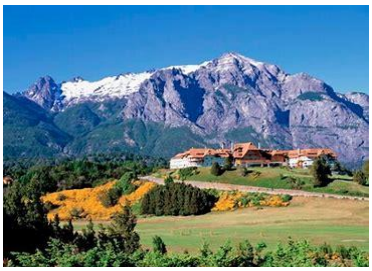
て

通じるアメリカン・ハイウエイ　を北上する訳だが、問題はヨシコがもう歩けないと言い出し歩き方を変えた。
自分一人で歩き、そのあとヨシコがヒッチハイクで車に乗せ荷を軽くするメリットがあったが、素性がよくないドライバーもおり細心の注意が必要だった。

南緯40度台は強烈な強風､偏西風が吹き行く手を阻んだ。アラスカまで通じるアメリカンイウエイにはACA（アルゼンチン自動車協会）のGSと簡易宿泊所があり、利用はしたが、中にはガラの良くない者が多く女連れには適さなかった。また道沿いの農場には泊まるのはおろか、キャンプさえも断わられることも多々あった。ともあれ3月下旬、歩いた距離が1000 kmに達した。

ゴベルナドール・コスタ（人口 2,000 人余）という賑やかな町を通り、アルゼンチンの南から数えて3番目の州、**リオ・ネグロ州**に入った。丘陵地には屋根の突き出たスイス風の山小屋が点在し、側面には険しい山々がそそり立ち、その間を縫うような数限りない河川が刻み入れていた。その後、アルゼンチンで最も魅力的な美しい場所、南米のスイスと言われる**バリローチェ**を訪れた。

ゴベルナドール・コスタ



南米のスイス　バリローチェ

次に**ネウケン州**に着いた。バルディア・デル・メディオでというパタゴニア高原の北端に達した。これから先はパンパセカ（乾燥した草原地帯）に到達した。パンパは水の供給が少なくなるので大量に水を携えて行く必要があったが、逆に猛烈な雨、吹雪にあった。カトリエルというところでヨシコを乗せてくれた家族に招かれ5日間も滞在した。その家の息子が通う商業高校にも招かれヨシコは日本の歌を歌った。

北部アルゼンチン

コロラド川を渡りパンパ州の草原地帯に入った。空気は冷涼で乾燥し視界は開け、真昼時には 30 km以上隔てた地平線を見ることができた。ひたすら歩き続けたおかげでメンドーサ州に入った。日本人居留地があると聞き訪

問、マキグチ家を訪問し歓待された。主人は空手道場を開き黒帯４段、アルゼンチンでは屈指の指南役であった。

1997 年 1 月 25 日、ウスワイアを発ってから丁度 5 か月、ついに**メンドーサ**に着いた。人口 214 万人（2022）大都市で、これまでに歩いた距離は **3,469 km**、南米大陸の三分の一をクリアした。大雑把に言えばパリからイスタンブールまでの距離である。バリボーサ家のガレージで寝泊まりすることになり長逗留した。ヨシコはすでに 27 歳、9 月 16 日、戸籍登録所で結婚登録し教会で結婚式を挙げた。ヨシコが妊娠していることが分かり、帰国することになった。メンドーサ空港は 1978 年のワールドカップのため改修閉鎖中で飛行機はサンファンから出発していた。暑さの中 3 日間 120 km**サンファン**まで歩いた。10 月、ヨシコは機上の人となり、その後、一人旅となった。

乾燥パンパ　年間降雨量 550 ㎜以下

メンドーサ（人口 214 万人）

サンファン（人口 11 万人）

サンファンから歩きだしたが、雲一つもない空から降り注ぐ熱気、目的地のタリスターの町に着くころ砂漠の熱風、前進を妨げた。誰かの納屋で休んでいたら，警官に拳銃を突き付けられ監獄にぶち込まれた。このような事はこれまで度々あったが、監獄は涼しくてよく眠れたことであった。翌日、釈放、サンファンら 159 km離れた町着いたが、ここでも、2 晩、警察のご厄介になった。11 月 8 日、一日大半を歩き、遂に**トゥクマン州**に入る。アルゼンチンで最も小さな州であり、インディオが住む。州都、**サルタ市**を過ぎ、さらに北に進み，**フフイ**の町を過ぎて、さらに北に向い激しい熱帯性雷雨中、11 月 28 日、南回帰線を越え、大アンデス高地に着く。ここは今までは別世界、いたるところに目にするのは牧草を食んでいるのは顔がラクダに似たラマだった。ますます多くのインディオを見かけるようになった。12 月の第一週、アルゼンチン最後まちラ・クイアーカに到着した。道路標識には「**ウスワイアから 5121 km**」と書かれていた。記述が前後するが、サルタ 12 月のクリスマス休暇が過ぎるまでサルタの牧師伝道家の賄い付きで過ごしたとある。

メンドーサ・ブドウ畑（アルゼンチン・ワイン主産地）

サルタ市

サルタ・フフイ（シエテコロール）

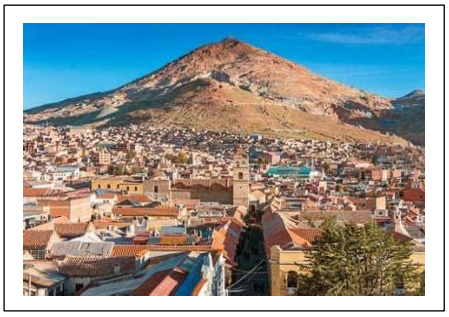
ボリビア

サルタからから国境に向かう汽車に乗り、アルゼンチン側の町ラ・クイアーカで降りた。ごくなだらかな丘を**ビリヤゾン**に向かて２，３歩登った時、突然頭がくらくらし、いてもたってもいられない気持ちに襲われた。
なんとかその日のうちに税関管理事務所に着いた。親切な事務所の人は夕食を御馳走してくれ宿泊した。
ボリビアではこのような管理事務所は30kmほどの間隔で設けられており、国営の宿場ともいうべき施設である。

ツビサというところで、2 日間ホテルに泊まった。辺境の地にガイジンが入って来るのは珍しいのか村の人々は大人や子供も戸口に出て来て、こちらをじっと目を凝らしている。ある晩、インディオの家で夕飯を御馳走になったが、おせいじにも美味しいとは言い難かった。この家では山羊が約 200 頭、羊が 50 頭、ロバが 3 頭いた。この地方を歩いていると、絶えず悩まされたのは道路を遮断している水の流れであった。3 月 3 日、**ポトシ**の町に入った。ポトシは世界で最も高い所ある町（海抜 4000m）で、かって銀山があり繁栄した町、現在は人口 26 万人（2020）の町である。4 日間滞在した。

ビリヤゾン

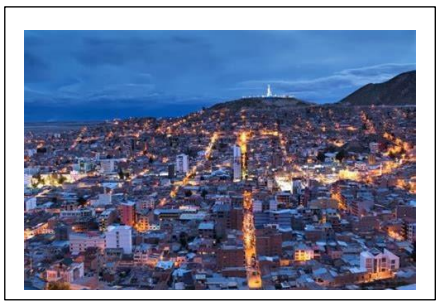
ツピサ　海抜 2850m



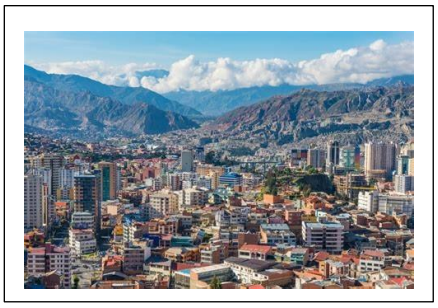
ポトシ　海抜 4090m

ボリビアの旅も半分近く終わり、**チャパタ**からは、ほこりっぽい平らな道がはるか地平線の向こうまで続いていた。歩いている道は標高 3,000m である。**オルロ**の町（人口 55 万人）に到着して驚いたにはモルモン教徒が多いことであった。オルロは銀採掘の拠点で 3 日間滞在した後、ラパスに向け出発した。オルロからラパスまで 200 km にわたって、平たんで真っ直ぐな舗装道路が続いていた。一帯には何千頭というリャマやアルパカが放牧されていた。高原地帯を北上するにつれ、民家の数も増え、人々の暮らしぶりに豊かさを感じられ、農地の面積も広くなってきた。ボリビアの首都**ラパス**の町に入った。東の方に美しい雪帽子をかぶった峰が現れた。イイマニ山だった。ラパスは海抜 3600m、世界で最も高い首都で 76 万人の人が住む。ラパスには 3 週間過ごした。
さらに北上し**タンピロ**を越えた丘の上で眼下に**チチカカ湖**を見た。標高 3,700m の所にある世界で一番高い湖である。この後、ペルーに入った。

チャパタ



オルロ



ラパス

ラパス市街

タンピロ

チチカカ湖遠望

以下、その２．ペルー・エクアドル・コロンビアに続く

写真はいずれも無料画像を使用。地図は帝国書院　最新基本地図（2011）を使用。